

吉蔵の浄土観に関する一考察

『観経義疏』を中心として

榎 屋 達 也

一 問題の所在

阿弥陀仏の浄土に関しては、中国（特に隋代以降）において様々な議論がなされ、その浄土に関する種別判定は、

第一は、化土説すなわち事浄土とみなして凡夫の往生を認めるもので、慧遠・智顗・吉蔵らの説である。第二には、報土として凡夫の往生を認めない説であり、撰論学派や法相宗が主張するところである。第三は、報化二土に通ずるというもので迦才・元曉・慈恩らの説がこれにあたる。⁽¹⁾

とあるように、大別すると三種に分類できる。この分類によると、吉蔵は第一の化土説を主張したということになる。

ところが、近年の研究においては、袴谷憲昭氏や伊東昌彦氏などによって、以下のような新しい視点からの見解が提示されている。まず袴谷氏は、

究極の「本迹」の立場からすれば、吉蔵は「本」としての法身もしくは真如、「迹」としての応（化）身もしくは応（化）土という、

二身説もしくは二土説を採っていたと考えられる。⁽²⁾

として、吉蔵の仏身仏土論に関して本迹思想の上から捉え直すという研究方法を提示し、また伊東氏は、

応身応土説が誤りだとは言いつれないのだが、どちらが真意であるとか、どちらに重きを置くなどすることは、吉蔵教学の上からしてみれば問題である。『三論玄義』において、「無得正観を以て宗と為す」と言うように、吉蔵はどれか一説を得て固執・偏執⁽³⁾すること否定する。

として、吉蔵の浄土観を「無得正観」という三論教学の上から捉え直し、従来の化土説に偏らない見解を示している。

そこで筆者も、両氏の指摘を念頭に置きつつ、吉蔵の膨大な著述から『観無量寿経義疏』（以下、『観経義疏』と略す）を取り上げて、吉蔵の浄土観に対する再検討を試みたい。

二 吉蔵における本迹思想

吉蔵の浄土観を検討するにあたって、まずは本迹思想につ

いて少し触れておく必要がある。本迹思想は『法華経』「如来寿量品」において、

如来秘密神通之力、一切世間天人及阿修羅、皆謂今釈迦牟尼仏出釈氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子、我実成仏已来、無量無辺百千万億那由他劫。

（『大正蔵』九・四二頁中）

とあるように、真の仏は久遠の昔に成道したものとして、仏の本地・本体（久遠の本仏）を表す面（本門）と、この世に現れた仏は衆生済度のために本地から迹を垂れたものとして、本仏の応現・垂迹を表す面（迹門）を説く『法華経』に基づくものである。したがって、『法華文句』「釈序品」には「従序至安樂行十四品、約迹開權顕実、從踊出訖経十四品、約本開權顕実」（『大正蔵』三四・二頁上）とあり、智顗は上記の文言（特に傍線部分）に注目し、『法華経』前半の十四品を迹門とし、後半の十四品を本門と分科したのである。

なお、「本迹」の用語は『注維摩詰経序』において、

凡此衆説皆不思議之本也。至若借座灯王請飯香土手接大千室包乾象、不思議之迹也。然幽閑難啓、聖応不同。非本無以垂迹、非跡無以顕本。本迹雖殊而不思議一也。（『大正蔵』三八・三二七頁中）

とあるように、東晋の僧肇が『維摩経』の所説において本迹説を用いたのが嚆矢とされる。⁽⁴⁾

以上、本迹思想の典拠を略述してきたが、その関係性に関

しては『法華文句』「釈寿量品」において、

諸経所説本迹者、即寂滅道場所成法報為本、從本所起勝劣両応為迹。今経所明、取寂場及中間所成三身皆名為迹、取本昔道場所得三身名之為本。故与諸経為異也。非本無以垂迹、非迹無以顕本。本迹雖殊不思議一也。

（『大正蔵』三四・一二九頁上）

とあるように、諸経所説の「本迹」は寂滅道場所成の法報身を本とし、二乗などのために示現される応身を迹とする。しかし『法華経』所説の「本迹」は、久遠劫以前の本昔道場所得の三身を本とし、それ以後の寂滅道場及び中間所成の三身を迹とする。そして本と迹は異なると言っても、本がなければ迹を垂れることはなく、迹でなければ本を顕すことはないという本迹の相即關係を示している。また、このような智顗の主張を受けて、吉蔵は『華嚴遊意』において、

此本是迹本。非本無以垂迹。此迹是本迹。非迹無以顕本。非本無以垂迹、由本故迹。非迹無以顕本、由迹故本。由本故迹、迹是本迹。由迹故本、本是迹本。迹本則非本、本迹則非迹。斯即非本非迹清淨。

（『大正蔵』三五・四頁上）

とあるように、本がなければ迹の垂れることはない、迹は本を由とする「本が迹」であり、迹でなければ本を顕すことはない、本は迹を由とする「迹が本」である。したがって、本も迹も独立的・絶対的なものではなく、非本非迹として本迹に分別を見ないのが正しい見方であり、本迹は本

来「相即不離」の関係であるとする。

本迹を字義的に解釈すれば、本から迹が垂れるという先後関係や優劣関係が見出されるが、吉蔵は本迹について「相即不離」の関係性を示し、決して優劣を認めないのである。

三 『観經義疏』所説の浄土思想

前節では本迹二門の關係性を略述してきたが、本節ではそれを踏まえた上で、実際に『観經義疏』所説の浄土思想について検討を加えていく。まず西方浄土に関しては、

若就通門為論、無非酬因、可云報土。別門不然。何者以法藏菩薩有本迹二門。就迹為論、在凡夫地以願造土、可云報土。…若論本門、此菩薩位居隣極、無更造業。唯是応現依正兩報。

（『大正藏』三七・二三五頁上）

として、通門（一般的な見方）では、酬因の報土であると言えるが、別門（特殊な見方）では、法藏菩薩には「本迹二門」があるとする。そして迹門では、法藏菩薩の本願に酬いて建立された報土であるが、本門では、法藏菩薩は隣極（等覺）の菩薩であり、更に業を造ることはなく、依正兩報は応現されたものでしかないとする。また、法藏菩薩に「本迹二門」があるとする根拠に関しては、

問、双卷則云応云報土耶。答、此是応中開応報兩土。非是異、別有報土。何者一往并土体謂之為報、於此報土示種種七宝為応土

也。非是酬因之報故為報土也。若就所化修因往生義為論、可為報土。然所化由因往生、應土中也。（『大正藏』三七・二三五頁中）

として、『無量壽經』（以下、『大經』と略す）にその根拠を求めている。この問答において吉蔵は、『大經』所説の浄土の本質は報土であるが、その報土は酬因の報としての報土ではなく、衆生の修因往生の意味としての報土であり、その場合でも衆生は「応土」の中へ往生するのだと強調する。

一見すると、吉蔵は化土説を主張しているかのようにであるが、一仏土を如来と衆生の立場において考察すれば、自ずから応土と報土の両面の見解が生じ得る。すなわち、衆生の修因往生の立場（約生的視点）からすると「報土」であるが、如来応現の立場（約仏的視点）からすると、衆生はどこまでも「応土」に往生するということになる。

このような浄土の種別判定に続いて、その浄土の様相（分段變易・三界撰不）に関しては、

今云、此應是分段生死。何以知之。世自在王仏所為國王而發心出家、始發四十八願造此浄土。又彼土壽雖無量必終訖。故知彼土分段生死。然分段与變易不可定判。何者穢則浄、浄則穢、分段与變易亦爾。分段即變易、變易即分段。浄穢因縁、二生死因縁、不相離。（『大正藏』三七・二三五頁中）

として、吉蔵は「彼土壽雖無量必終訖」という、浄土の寿命の有終を根拠として、一度は分段生死であるとの見解を示す

が、直後に「然分段与変易不可定判」と述べて、即座にそのような定まった判断を否定し、二生死の因縁不相離であることを強調する。また、三界摂不に關しては、

今明、就方便生与実生為論、可云有方便三界実生三界。但以惑用為明之。何以知然。双卷經云、「三十三天依何而住。仏云、依業報住」。以義制之、有三界也。 (『大正藏』三七・二三五頁下)

として、吉蔵は三界にも方便三界と実生三界があると示し、特に『大經』所説の三界は「方便三界」に当たるとする。したがって、分段變易・三界摂不の問題は、吉蔵にとってはあくまでも「迹門」における議論であり、現ぜられた「迹」であることに変わりはないということになる。

四 結びにかえて

本論では、吉蔵の本迹思想を念頭に置きつつ、同著『觀經義疏』に説かれる浄土思想について検討してきた。同書においては、本迹二門の關係性が十分に論じられていないため、その思想をどのように理解すべきなのかは、他の著述に依らなければ把握できない部分も多く存在していた。

それと同時に、吉蔵の真意が化土説にあるとの見解が大勢であったことは、道綽『安樂集』卷上において、

問曰、今現在阿弥陀仏是何身、極樂之國是何土。答曰、現在阿弥陀是報仏、極樂宝莊嚴國是報土。然古旧相伝、皆云阿弥陀仏是化

吉蔵の浄土觀に関する一考察(榎屋)

身、土亦是化土。此為大失也。

(『大正藏』四七・五頁下)

とあるように、吉蔵自身も「古旧」の説(化身化土説)に含めて考えられる傾向が強くあり、特に『觀經義疏』が単なる浄土教関連の註釈書として、浄土教の範囲内でのみ理解されてきたからではないだろうか⁽⁵⁾。

- 1 桑原勇慈「中国浄土教における仏身仏土論の展開」(『仏教論叢』四五号、二〇〇一年)一四三頁。
- 2 袴谷憲昭「吉蔵『觀無量壽經疏』と浄土思想」(『三論教学と仏教諸思想』春秋社、二〇〇〇年)一八一頁。
- 3 伊東昌彦「吉蔵の弥陀身土論」(『南都仏教』八八号、二〇〇六年)四四頁。
- 4 智顗以前に本迹説を唱えたと伝えられるのは、僧肇・僧叡(道融)・慧観の三師であり、いずれも羅什門下として有名である。
- 5 伊東氏の指摘のように、本迹という概念を用いること自体すでに本門的な思考の表れであり、同書が本門の全体的な視野をもって論理を展開させていることも事実である。

〈キーワード〉 吉蔵、『觀經義疏』、西方浄土、本迹二門

(龍谷大学大学院)